紺狐

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺狐

【Ｎコード】

Ｎ５１４９Ｅ

【作者名】

水色ペンキ

【あらすじ】

明治の初め、文明の足音がまだ山の辺には及ばぬころ。貧農の清造は山中の行きがかりで一匹の仔狐を拾い、これに紺と名前をつけた。この狐、里で暮らすことを望んで人の子に化けて暮らすが、やがてある事件を契機に正体が露見してしまう。村は紺を排除する者らとこれを守ろうとする者らとに分かれた。紺は幸福になれるのか。

これは御一新ごろよりこの村に伝わる話である。
鈴里の清造は独り者の百姓であった。年の頃は四十過ぎか、寺にゆかねば確ともわからぬ。この男、ある夏の夕べに山で兎の罠をみた帰り、藪の中からもし、もしと呼ぶか細い人の声を聞いた。分けて見れば猫ほどにも躰の小さな女童(めわらわ)がひとり、まさに大きな青大将に呑まれんとするところである。清造はふんと鼻を鳴らした。
「おんし狐じゃろう。人にしては小さすぎるわ。で、なんぞわしに用かね」
「化けて人なりと申し上げたいところですが、このありさまではそれも叶いませぬ。いかにもわたくしは狐です。どうかお助けくださいまし。見てのとおり、わたくしはもうすぐ蛇に呑まれてしまいます。大きな鉈(なた)を持っていなさるでしょう。それでなんとか、ひとつ」
「山の怪に関わりとうない。それにおんしらは喰いつ喰われつ、そういうもんじゃろ。いまおんしは蛇に喰われる。いかにも運が悪かろう。じゃがもしこの不運がなかったらば、おんしも長じて蛇をとったじゃろうな」
「おっしゃるとおり――」狐はさめざめと泣き出した。
清造はしばし草の上なる獣の業を眺めていた。蛇の顎(あぎと)は狐の体をがっしりと咥え、喉と思しき頭のうしろが餌の太さに大きく膨れている。しばらくすると蛇はついと身を捩(よじ)って、狐の――いや童の腰のあたりに当てていた鋭い牙を、少し上まで動かした。紺色の着物に白い牙の背があたって、実際は柔らかい毛なのであろう、偽りの木綿を深く割りながら次の噛みどころを探っている。やがて蛇の口が大きく開いて、その太さが首を伝って尾のほうへと抜けていった。狐の体がびくりと震えた。毛の中で牙が刺したか。だが狐はすすり泣くばかりで、もはや泣きごとは言わない。
そのとき清造は不意に憐れをもよおした。急に下草を跨いで蛇の

ところへ歩み寄ると、おもむろに身を屈めて細長い首を手に掴んだ。そして逆手で鉈を巻いていたぼろを払い、刃を返して、四角い峰を蛇皮に当てがうと、尾に向かってざらりと撫でた。蛇の緊張が鱗を通して清造の指に伝わった。

「蛇よ。わしはこの狐が少し哀れになった。こいつをくれんか。わしはおまえをぶつ切りにはしとうない。狐を吐けば、かわりにわしの兎を一羽くれてやるぞ」

蛇の耳に人の声が届くものか知らん。しかし狐も喋る不可思議、しばし思案ののちに、果たして蛇は小さな狐を吐きだした。腹から下は化けきらず、濃い稲穂色の毛皮のままだ。ただ牙の刺した痕だろうか、ところどころに黒い血の染みができている。

「――ありがとうございます。ご恩は忘れませぬ」

狐はそういってその場に座り込んだ。清造が蛇との取り引きを終えて、この長虫が兎を呑み込むのを珍しげに眺め終わったあとでも、狐はなお立ち上がる気配がなかった。蛇もじっととぐろを巻いたまま、わけ知ったようにじっとその場を動かない。

「おんし、足が立たぬな」

清造が問うと、狐はこくりと頷いた。すると清造、いきなりその首を掴んでひょいと持ち上げ、相手が驚いて身を捻(ひね)るのもものかは、懐を開いてぽとりとその中に落とした。狐は木綿に背を預け、しばしの間二本の腕と一本の足で男の腹を突っぱった。だが清造が布の上からその背を抱くと、暴れても詮ないことに気づいたか、やがて大人しく身を丸めて帯の上に収まった。その始末を見て、蛇もようやく藪に潜った。

「ほうっておいては、兎損になるからの」

そういったが、相手は返事をしなかった。片手で据わりを整えると、汗の冷えた人肌に、獣の柔毛が温かかった。気づけばこの狐、いつのまにか総身狐に戻っていた。

そうして清造はこの狐を、村外れのあばら家に連れて帰った。

清造は貧しかった。日々の暮らしに余分なものは何ひとつとして持ってはおらぬ。だがこのとき野良に使うざるを一枚潰し、布団から抜いた古綿を敷いて、ぼろをかけ、その上に狐を寝かせて何もいわずに炉端においた。狐のほうも黙ったままで、まずはゆっくり傷を嘗めつつ、目の端で清造の出方を疑うようだ。獣の傷は治るのがはやい。二三日も置いておけば自然に癒えて、勝手に山へ帰るであろう。清造はそう目論んでいた。だがそのような期待は、わずか半日で仕舞いになった。

悪いものでも入ったか、この子狐、夜半から急に高熱を出して、昼夜の別なく昏睡するようになったのだ。傷は膿んで、たまに目を覚ましても前後を覚えず、朦朧としたまま空しく啼いてはすぐまた深い眠りに落ちる。清造は獣の看病法など見当もつかなかった。しかしわからぬながらも傷を洗って、割れ茶碗から箸を使って舌の上に水を垂らし、昼は風通しよくして野良に出で、夜には傷の臭いに鼠が寄らぬよう、ざるの脇に自らの寝床を敷いてこれを守った。そうして十日めに、ようやく狐から熱病が去った。一朝(いっちょう)清造が目を覚ますと、蛇に呑まれかけていたあの女童の姿が、九つか十か、まともな人の子の背格好となって寝床の脇に正座していた。狐は清造が目を覚ましたのをみると、床に手をついて礼を述べた。

「このたびはまことにお世話になりました。なにかおん礼をいたしたく思いますれど、生憎わたくしも畜生の身、いかで人間のお役になど立てましょう。鼠とり、雀追いくらいならばわたくしにも務まりましょうが、里のひるひなか、狐が田地(でんち)をうろつけば面白く思わぬ方々もおいででしょう。なにかこれぞというものがございましたら、どうぞ仰ってくださいまし」

清造は黙ってそれを聞いていたが、やがて静かに口を開いた。

「それはよい。おんしに手を貸したのもしょせんはひと時の気紛れ、あまり恩に着ることはないぞ。そもそも狐は人を化かして困らせるのが本義、礼などと殊勝ぶっては山の神が笑おうよ」

「しかしそれではわたくしの気が済みませぬ」

「構わぬ。それにおんし、そもそもひとり前に立てるのか。寝ておるみぎり、後ろの足が一本、枯れ枝のように固まっておったように見えたがの。蛇の喉は呑んだものを砕くという。大方、その足から先に食われたんじゃろうが。違うか」

小さな頭がうなだれた。

「立てぬのだな。……なあ狐よ、その足がよくなるかわしは知らん。じゃがの、いまは化けて偽っとるが、おんし今は骨と皮じゃろ。その体でなにができる。よしんば山に戻ったとして、きちんと生きてゆけるのか。産まれた年の秋までは、狐の児は親と巣穴で暮らすと聞く。おんしは親を亡くして巣穴を出でて、藪のうちで餌を探すうちに蛇に喰いつかれたもんじゃろう。なあ狐よ、遠慮をすることはない、迷惑ついでにしばらくここで遊んでゆけ。なに秋が来れば、屋根の下でやらねばならぬ手仕事もある。そんなものでも手伝って貰うさの」

狐は肩を震わせて泣きはじめた。

「泣くな。ところで、おんし名はなんという」

「人の呼ぶような名はございませぬ」

「では紺じゃ。紺の木綿を着ておる――ように見えるからの」

「こん？」

「そうじゃ。呼びやすかろ」

「こん」

「そうじゃ」

その日から清造と紺は親子のような暮らしを始めた。飯も同じ炉辺に囲み、紺に力が戻ってからは野良の手伝いもするようになった。紺は眠るときだけはざるの寝床で狐に戻るが、それ以外はほぼ人の子として日々を過ごした。村の者は独り者の清造が養子をとったと噂して、ゆくゆくは婿を取らせて家を継がす積もりかなどと囁いた。いつしか二人はこの生活に慣れた。だが紺の足はついに癒らなかった。そして秋がやってきた。

「清造は、ざるをつくるのが上手じゃの」竹を編む清造の背にむかって紺がいった。冬毛に抜け替わった毛の色も鮮やかに、ざるの寝床に半身を起こしている。隙間風の冷たくなりだした長月の夜のことだ。
「そうかの。里のもんはみな作るぞ」
「そうかもしれんが、清造のざるは格別じゃ」
「そうか。まあ、日の本広しといえども、狐の寝床になるのはわしのざるだけかも知らんのう」
　それを聞いて、紺は嬉しそうにすんすんと鼻を鳴らした。しかし清造はそれに同じず、相手に背を向けたままで、考え込むように押し黙ってしまった。竹の皮を操る手だけが黙々と動きつづける。しばらくして、清造は静かにことばを続けた。
「ところでな、紺よ。おんし、いつ山に帰る」
　それを聞いて、紺はぴくりと身を強ばらせた。
「おんしは狐じゃ。里の暮らしには苦労もあろう。気を遣っとるのか知らんが、わしはもう十分に返してもらった。冬か春か、おんしの都合のよいときでよい。山に帰って狐の幸せを探したらどうじゃの」
　しばし沈黙。
「清造は、おらがいると迷惑か」やっとのことで、紺が声を絞り出す。
「そうではない。だが狐の一生は短かろう。いずれ帰らねばならんのなら、わしにかまけて時を潰すのはいかがなもんかと思うての」
「じゃあ、じゃあ春まで――いや、夏か――」
「煮えきらんの。いまは秋じゃぞ」清造は紺に背を向けたまま、声だけで笑った。またしばらくの沈黙。
　やがて紺がおずおずと口を開く。
「清造、おら、ずっとここにおってはいかんかの」
「ずっと？」
「うん」清造の出方を窺うように、紺はことばを切った。ややあっ

て続けて、
「実をいうとな、おらは山に帰るのが怖いんじゃ。山でひとりで暮らすのがこわい。清造に拾われてここへきたのはたまたまじゃったが、里の暮らしは楽しいよ。じゃがの、山はの、山はの、恐ろしいもので一杯じゃ」
清造は内心しまったと思った。紺を帰す時機を誤ったか。
「蛇か」声に出したが、よもやそんな単純なものでもあるまい。
「蛇もじゃが。おおかみも、山犬も、猪も、熊も、なんでもじゃ。——藪も谷もな。清造、おらを臆病と思うか」
「……いいや」
「おらはあの夕、蛇に呑まれて死ぬはずじゃった。万一なんとか逃れ得ても、野におったれば傷がくさって死んどったじゃろう。それを清造に救われて、いまこうやって息をしておる。毛繕いもできる。おら幸せだよ。じゃがの、本当はな、山のものなれば、あのとき助けを求めてはいけんかった。人の手を借りてまで生きてはいけんかった。おらが足萎えになったのは、山の神様のばちが当たったのじゃ」
「そんなことをいうな。死んでしもうては浮かぶ瀬もない」
「人の世なればの。じゃがおらはもともと畜生じゃ。畜生のことわりとは元来そういうもの。足が悪ければ餌はとれん。ぎゃくにほかのものに喰われて果てる定めじゃ。山の神様はおらの脚にしるしをつけて、戻らば死ぬぞとのたもうた。……おらが里にいるのは悪いことだと知ってるよ。じゃがの、おらにはもう行くところがない。帰るところがない」
これがおかしな理屈なのは清造にもわかった。帰って死ぬのが畜生の道ならば、山の神はそれを閉ざしておらぬ。畜生たることを拒んでいるのは、山の神でなく紺である。人里に染まったのであろう。だが清造はそれをいわなかった。いってどうなる。いかにも紺は狐であった。化けておらねば山で出会うあの黄金色の獣だ。だが話してみよ、ともに膳を囲んでみよ、菜をつみ歌をうたい箸の使い方を

教えた子がたとい狐狸のたぐいであっても、これをしてなんの躊躇(ためら)いもなく狼の前に捨つることができるならば、清造のほうがむしろ畜生ではないか。

「――なるほどの。そんなら、好きなだけ居るとよいわ」

「ほんとうか。迷惑でないか」

「なにも迷惑なことがあるか」

「そうか、そうか」

紺はすんすんと鼻を鳴らして喜んだ。しかし清造の心は物思いに沈んだ。わしはこの子をどうすべきなんじゃろう、と。

収穫の季節が終わりに差しかかると、緑のものは畑から消えて、秋色(うね)の畝には枝枯れの小豆と南瓜が残るばかりとなった。清造の耕す土地は乏しかったが、他の家の刈り入れの手伝いをしたり、夜な夜な編んだ竹皮のざると交換したりで、村でとる作物のほとんどを僅かずつだが手に入れていた。紺には知るよしもなかったが、清造がこのように豊かな冬備えをしたのは例年にないことであった。

あるとき紺が、夜露を避けて家に取り込んだ小豆のざるを見ていった。

「こうも長く乾かさねばいけんとは、小豆とはめんどうな食い物じゃの」

清造はそれを聞いて笑った。

「そういうな。昔はみな年貢で取られて、わしら百姓は食えんかったものじゃ。そうさのう、正月まで気長に待てば、そのざる一杯分、餡(あん)を作ってやろうかの」

「あん？　それはなんだ？」

「うむ。甘くてな、こう、黒いもんじゃ。わしらも滅多に食えはせん」

「ふうむ――」

「あれは旨いぞ。粟飯なんかとはわけが違う。食うてみたいとおもわんか」

「そんなら、食ってみたい」
「よし。そんだらそのざる一枚、おんしが守れ。濡らしてはならん。ひとつところに置き放してもならん。虫がつくからの。ただし、一枚だけじゃぞ」
こんなやりとりも親子らしい。干すも取り込むも全部のざるをひとときにに行うのだから、一枚だけの守りなど実際には名ばかりのものだ。だが「紺の豆ざる」はよい玩具となった。暇さえあれば揺すっている。床に見つけた粒を拾って、ひそかに自分のざるに返す。まるで人の子と変わらない。清造はそんな紺を愛おしく思った。
だがやはり紺は狐の子であった。この穏やかな生活はある日突然綻びをを見せて、あれよという間に終わりを告げたのだ。待ちかねた冬は、それを想って待ったようにはやってこなかったのである。

空の涼しい晩秋の一日のことだ。大人たちが畑の始末をしている間、子供らは野っ原で久々の鬼ごっこに興じていた。紺もすでにその一員であった。はやり病も飢饉もなく、無事にその年を終える目処が立って、村の者のもっとも心落ちつける時期のはずであった。
子守をしていたひとりの娘が、急に用を足したくなった。そして何の気なしに石の上に赤子を寝かせ、脇の小川に降りていった。だが寸時のことと甘く見たのがいけなかった。山の辺を飛んでいた鷹がこれを目ざとく見つけて、この児に向かって急に舞い降りたのである。
大きな鷹であった。畳んだ翼が黒い影となって、およそ人の気づかぬ高みから、石を落とすように赤子のうえに飛びかかった。それを見て野辺の子供らが悲鳴を上げた。だがその凄まじい速さに駆け寄って追い払う暇もなかった。ただ一匹、猫犬といわれる狐の紺を除いては。
獣の勘である。紺は鷹が赤子を窺ったとき、すでに危険に気づいていた。鷹が大きな翼を細めて逆落としに急降下に入ったそのときには、紺は人の姿を捨てて、はや三本の足で馳せていた。蹴り出し

の力が弱く、片方の肩がどうしても落ちる。だがそれでも人よりよほど速かった。そして鷹が鈎爪で赤子を掴もうとしたその刹那、紺がその脚に食らいついた。

鷹が鋭い叫びをあげて、固い羽根がばたばたと激しく空を打った。顎で支えた紺の体が、釣った魚のように宙にくねる。黒い嘴が一閃して、小さな狐の頭を打った。かつんという音が子供らにも聞こえた。途端に紺の顎が開いて、力を失った体が捨てた布のように草の上に落ちる。鷹は赤子の代わりにそれを掴もうとした。そのときようやく餓鬼大将らの投げる礫(つぶて)が鷹に届いて、不利を悟った猛禽は、ようやく獲物を諦めた。

清造にそれを知らせたのは子供らの一人だった。驚いて駆けつけてみれば、村の子供らが野の一隅を囲んで立って、厳しい顔した幾人かの男らと真っ向から対峙していた。異様な雰囲気であった。その脇には赤子を抱えて泣く娘、それに付いて頻りに慰める女がいる。騒ぎに気づいた大人たちが、畑の向こうから続々と集まりつつあった。子供らの輪の中では、一人の娘が、狐姿の紺を膝上に載せて座っている。耳が裂けて半分無くなり、額のところに大きな傷があった。顔全体が血に濡れて、伏した体は動かない。

「どうしたのじゃ。何があった」

清造の問いに子供らが一斉にさえずり始めた。なんとしたことだ。よし紺がまことの人の児であったならば、このような目に遭わずに済んだに違いない。だが清造はすぐに思い直した。これは狐なればできたこと、人にはできぬことをしたのである。紺は誇りに思ってよいのだ。それに水を差してはいけない。

紺は激しく弱っていたが、ともかく死んではいなかった。手当をすれば助かるやもしれぬ。清造は紺を抱えて立ち上がると、周囲に一礼してその場を辞した。ところがそれに待ったをかける者があった。組頭の又三だ。

「おんし、わしらはその子が狐だなどとは聞いておらぬぞ」その低

い声は、清造を威嚇するように抑揚がない。
清造は静かに答えた。
「言うておらなんだからな。だが紺はわしの子じゃ。文句はいわせん」
「ならんぞ清造。侘び住まいで化かされたか。村の内に狐狸(こり)を匿うなど、見ぬ振りして許すわけにはいかん」
「あとにしてくれ。わしは、急ぐ」
振り切る清造の肩を掴んで、又三はまだ離れない。
「よいか、狐は災いの元じゃ。おんしだけ騙されるならまだよいが、居つけばほかの者にも害がある。病を運ぶともいうではないか。わしは村の顔役として――」
清造は又三を無視して歩き出した。
「待たんか。おんし、相当化かされておるぞ。眉に唾でもつけてみい。そりゃ、途端に目が覚め――」
いいながら又三、清造の肩を引っつかんで、ひと嘗めした人差し指を相手の眉に押し当てようとした。清造はその指先を躱し、片足で又三の腹を蹴りつける。小柄な又三は身を折ってうめくと、よろよろと草の上に尻餅をついた。
「清造、きさん――」
そこに嘉平という体格のよい男が割って入った。浅黒い肌をした中年の猟師で、鷹に襲われた赤子の父である。
「又どん、済まんが抑えてくれ。あの子にはいま手当がいる。村のことはあとでもよかろ。ここはわしに免じて、清造の好きにさせてやってくれんか」
「嘉平、貴様まで狂ったか」又三は唾を飛ばして吐き捨てる。
「そうではない。おんしの立場なら道理もあろう。だが今あの子を見捨てれば、おんしは人の道を忘れることになるぞ。それこそ畜生の――」言いかけて止めて、「鬼の行いじゃぞ」その目が又三を刺すようにねめつける。
又三は黙った。清造は立ち去り、あとには赤子の声と子供らのす

すり泣きだけが残った。

後刻嘉平が清造のあばら屋を訪れたとき、家の戸をしきりに出入りする子供らの姿に驚いた。そのうち一人が嘉平を認めてなにごとかを中に叫ぶと、たちまち幾人かが飛びだしてきた。年かさの男の子が進み出る。餓鬼大将の文六だ。

「おっちゃん、清造の手伝いに来たんか」

「様子見だ。紺ちゃんは無事なんか」

「寝ておるが目を覚まさん。清造は付きっきりじゃ。わしらは湯を沸かしたり薪割ったりしとるが、これ以上はなんもできん。おっちゃん猟師じゃろ。なにか山の薬でも知らんのか」

文六の声はしっかりとして、子供ながらに友の身を案じる気遣いが滲んでいた。普段村の子らは無愛想な嘉平を恐れて話しかけないくらいだが、このときは最早そのようなことを気にする様子はない。

「山の薬か。知ってはおるが、狐に効くかはわからんぞ。傷なら大葉子（おばこ）、あとは益母草（やくもそう）、気付けには酒が最上じゃが」

「酒は清造のとこにはない」

「じゃあおんし、わしの家から取ってこい。わしが寄越したとお石に言え。手の空いた者は言った草を集めろ。やることのある者はそのままでよい」

途端に数人が目を見交わし、三々五々散っていく。嘉平は清造の戸を潜った。

「どうじゃ――」言いながら中を見て、嘉平ははっと息を呑んだ。一見して普通の貧家に変わりはないが、猟師の嘉平にとって、そこに漂う奇妙な気配は見紛うはずもなかった。板の間の隙間や壁のささくれ、あるいは土間の隅やら家具の下など、あちらこちらに丸い毛の玉が絡まっている。淀んだ内部の空気には、嘉平が嗅ぎなれた獣の臭いが微かに混じっていた。狐穴の雰囲気――である。

清造は入り口に背を向けて、囲炉裏の脇にうなだれていた。じっと何かを見詰めたままで、嘉平のほうを振り返ろうともしない。

「清造よ」
嘉平が再び呼びかける。清造はやはり振り返らなかったが、僅かに肩を動かしてそれに答えた。
「様子を見にきた。上がらせて貰うぞ」
そういって草鞋を脱ぐと、嘉平は板の間に上がり込んだ。清造の後ろに立って肩越しに覗けば、古ざるの上に布を張った粗末な狐の寝床が見えた。紺はそれに伏して口を半ば開いている。息は荒いが眠っているようだ。鮮やかな冬毛の艶が心なしか濁って、瞑る目の間に鉤裂きになった傷が血を固めている。
「具合はどうだ」
「――傷そのものは大きくない。だが子供らの話では頭を強く突かれたらしい。深さが分からん」
「文六に酒を取りにやらせた。外の餓鬼どもに薬を集めるよう言いつけておいたぞ。効くかどうか分からんが、多少の助けにはなるやもしれん」
「すまんの」
「なんの。うちの坊主を助けてくれたんじゃ。これしきのこと」
しばらくして文六が戻ってきた。手には徳利を提げている。ふたりはそれを受け取ると、早速とばかり一滴舌の上に落としてた。だが紺はわずかに息を乱すだけで、一向目を覚ます気配はない。もう一滴。覚まさぬ。もう一滴……。……。
と、急にぐったりしていた四肢が痙攣した。鼻先の薄い毛皮に皺が寄って、肺の息を絞り出すように激しく咳き込みだす。清造は慌てて紺の背中に手を添えると、掌の熱を伝えるようにゆっくりと毛並みをさすった。
「紺。こん」清造が静かに呼びかけると、紺がうっすらと目を開いた。清造、嘉平に文六と、見守る三人の口元が安堵にほころぶ。紺は長い舌をぺろりとなめて、口を開けたまま大きく息をついた。
「清造……。あたま、いたい」消え入るような声で言う。
「怪我をしておる。ゆっくり治せ」

「それと、なんだか、くさいな」
「くさい？　酒の臭いか。この嘉平が持ってきてくれたんじゃ」
「かへい？」
「おんしが救った赤子の親よ。おんし、よくやったぞ。もう村の一員じゃ」
「そうか……あれの」紺は呟いて溜息を吐くと、また静かに目を閉じた。「あれの親か」
嘉平は紺を見詰めていたが、この子狐のことばを聞いて、何もいわずに立ち上がった。見上げる清造を気にも留めずに、土間へ降りて草鞋を履く。吃驚した文六がそれを追った。
「どうしたんじゃ、嘉平」
「いいや……わしは、帰るよ」
文六は訝しげな顔をする。嘉平は構わず、今後の処置を手短に説明した。
「嘉平、おんしがやってくれれば確かなのに」文六が不満げにいう。
「わしは居らんほうがいい。わしがおっては、あれが休めぬ」
「休めぬとは？」
訊かれて嘉平、わずかに目を伏せた。
「……獣はみな鼻がよい。あの子がいう臭いものとは、とどのつまりわしのことよ」
「どういうことじゃ」
「巣を暴く人間の臭いじゃ」
嘉平は低い声でそう言うと、踵を返して戸口を潜った。嘉平がこの家を覗いて狐穴の雰囲気を感じ取ったように、紺は嘉平から猟師の臭いを嗅ぎとったのだ。嘉平がそれまでに殺した狐は二百を下らなかった。あるいはあの子の身内の誰かを嘉平が撃っておるのやもしれぬ。ありうることだ。猟師につく強い臭いはみっつ、獣脂の臭い、弾ぐすりの臭い、皮をなめすミョウバンの臭いだ。このうち獣脂の臭い以外をあの子が知っておるならば、恐らく紺は山で猟師と行き会ったことがあるのだろう。それも恐らく、この嘉平と。――

だとすれば、わしがおってはあの子の気が休まるまい。

親どもが禁じたのか、子供らははじめの日以来清造の家を訪れなくなった。文六だけが代表としてしばしば薬を届けにきた。それ以外では嘉平の妻のお石がたびたび粥を持ってやって来るくらいであった。清造はいつかのように、居れるだけの暇を使って紺を看病した。紺はたびたび頭痛を訴えたが、怪我そのものは大過なく快復していった。だがふたりは以前のようには快活に話さなかった。お互い石を呑んだように心に引っ掛かるものがあったからだ。清造は村のうちで紺を養う難しさを思って日々懊悩(おうのう)するが、それを紺に打ち明けるわけにはゆかぬ。紺はやはり村人たちに受け入れられぬ自分を思い、また嘉平のごとき人間を憎まずにはおれぬ自分を知って塞ぎ込んだ。そうしたある日、この貧しい家に訪問者があった。又三と名主の庄兵衛である。

「清造、入るぞ」

板戸越しに声を掛けた又三が、返事も待たずに入ってきた。それに続いて庄兵衛だ。渋茶の小袖に柿色の三尺帯を締めたこの老人は、白い眉の下に険しい目を窪ませて、引き結んだ口の端を押し広げるようにして話し出した。

「清造よ。その後、狐の具合はどうじゃ」

清造は寸刻相手の顔を見詰めていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……だいぶようなった。みなのお陰じゃ」

「そろそろ山に帰せるか」

「……どうかの」

お互いに言葉を切る。次を継いだのは又三だった。

「いうたはずじゃ。狐を村に置くことまかりならん。ほかの者も恐れておる」

「なんぞ紺を恐れることがあるのか」

「そこは狐じゃ。いつなんどき村のものを謀(たばか)るやもしれん」

「又三、いうてよいことと悪いことがあるぞ」清造の声が低くなる。
「清造よ。おんし、もう化かされておるんじゃないのか」
「……なにを」
庄兵衛が割って入った。
「やめんか。おんしら、人同士で争ってなんとする」
ひと。この言葉に清造の顔がまた険しくなる。しかし庄兵衛は無視して続けた。
「なあ清造よ、おんしにもわかろう。村のものみなその狐が嘉平のやや子を救ったことを知っておる。だがそれとこれとは別なのじゃ。狐は病を運ぶ。また気紛れに人を化かす。それが生まれついての性というものよ。もともとわれらは里のもの、狐の子は山のものじゃ。その紺とやら、何を思って里に降ったか知らん。だがな、置いておいては皆が不安がる。一切悪気はのうてもな」
「あれは足が悪いのじゃ。山には帰せん」
又三がにやりと笑う。「それもうまいこと化かされとるんじゃないのかの」
途端に清造の拳が一閃した。殴られた又三、よろけて壁際にへたり込む。壁に立てかけた鍬鋤（くわすき）の類が音を立てて土間に転がった。
「おんし、この」又三が吼えて、倒れた鍬を掴もうとする。だが清造は一瞬はやくその先端を踏みつけた。柄が立つところを片手で掴み、腰の高さに振り上げる。又三は慌てて土間に背をつけ、足で清造を蹴りつける。清造は踝を打たれて思わずうめいた。
「やめい、やめんか！」
庄兵衛が一喝した。清造は一瞬躊躇して裸足で土間を踏みしめたが、やがて鍬を降ろすと板の間に上がった。何とか立ち上がった又三が燃えるような目で清造を睨む。
「おんしの了簡（りょうけん）あいわかった。好きにせい」
庄兵衛が言い捨てて又三を促した。「帰るぞ」
二人は厳しい顔をして帰っていった。その一部始終を紺は黙って聞いていた。

清造が又三を打ち殺そうとした、もう大概化かされておる――。この噂は翌日には村中に広まっていた。あるいは又三か庄兵衛が広めたのかもしれない。清造はお石からそのことを聞いたが、勝手にしろとただひとこと吐き捨てた。だがお石が清造にもたらした話はそれだけではなかった。その前日、庄兵衛の息子が嘉平のところに火縄を借りにきたというのだ。

「あのひと追い返したけどね。善吉のやつ随分恨めしそうな顔してたよ」

このことは清造を少なからず不安にさせた。庄兵衛のところに鉄砲を使う用などないはずなのだ。

その二日あとの昼ひなか、火縄を撃つぱんという音が突然村じゅうに響き渡った。伏せていた紺がびくりと身を震わせた。清造は険しい目を壁に泳がせ、撃ち手との距離を推しはかった。乾いた音が山に木魂（こだま）し、二度、三度と往復する。それで清造にはそれが里の内で撃った音だと知れた。猟師は山でしか銃を使わぬ。したがってこの銃声は嘉平のものではなかった。善吉がほかの村から火縄を借りて、試し撃ちでもするものだろう。それ以外には考えられぬ。

この音が合図となって、小半時もすると清造の家に続々と人が集まり始めた。

最初に来たのは赤子を負ったお石と嘉平だった。二人は遊びに来たのだといって、持参した大きな南瓜（かぼちゃ）を清造に見せた。お石が飯の支度をはじめる。嘉平は家に入るのを憚って、外で水汲み薪割りをすると申し出た。清造は有難くそれを受けた。

次にやって来たのは子供らだった。文六に率いられた村の子らがまず四人、あとは連れだって二人、また三人と、続々とこの屋の戸口を潜りぬけた。みな何某の土産を携えていて、誰もがただ遊びに来たのだと――いった。

家はにわかに活気づいた。昼間から贅沢な煮物をつついて、みな

朗らかに談笑した。ただふたり言葉少なな清造と紺とを除いては。そしてその場の全員が、きたるべきものを待って緊張していた。恐らくその日の夕暮れまでに、この家に人里の仕置きというものがやって来る。――戦わんか。

夕方も近くなって、それはようやくやってきた。庄兵衛を先頭にした村の男達が八人、めいめい棒や網を持って清造の戸を叩いたのだ。その中に善吉はいなかった。かれらは家の中に人が多いのに驚いた。

「清造よ、考え直したか」庄兵衛がいう。清造は黙って首を振った。

「おんしも昔は道理の分かる男じゃったがの。恐ろしいことじゃ。石、それにこんな餓鬼どもまでみな狂わされたか」

清造は答えない。

「わしらが祓ってやる。どけ、清造」

庄兵衛が前に出ようとしたが、清造は腕を広げてそれを遮った。

「なんとしても抗うか、間抜けめ」

庄兵衛が清造を睨みながら後じさって、かわりにうしろの男どもが前に出た。各々険しい顔で獲物を握り直している。

「恨むなよ」一人がいった。

と、戸口の陰にいた文六が、いきなり強く戸板を閉めた。おもむろに鋤をとり、素早く突っかい棒をかける。外の男らが怒号をあげ、がたがたと戸板を揺らしはじめる。子供らがわっと歓声を上げてそれを抑えにかかった。板を蹴るばしりという音がして、戸の下端が手前にずれた。それを文六が蹴り返す。清造と子供ら、外の男たち。凄まじい押し合いが始まって、あばら屋の柱がぐらぐらと揺れた。

そのときお石が悲鳴を上げた。戸に付いた幾人かが振り返ると、お石の視線は板壁に穿たれた窓を見詰めている。窓からは、黒い筒先が――火縄の銃口が、獲物を覘(ねら)って身を乗り出す蟷螂(とうろう)の首のように、ぬうと中に差し込まれていた。

紺が跳ねて、寝床のざるがくるりと踊った。同時に筒先が僅かに上がって、雷鳴のような銃声が屋内に轟く。誰もが身を強ばらせた。

ざるが投げ捨てた笠のように壁際まで吹き飛んだ。床板が割れて、白いささくれがぱっと辺りに飛び散った。紺は隅に積まれたがらくたの間に飛び込んで、そのままそこに潜りこんだ。長い尻尾だけがそこから出ている。窓の外で叫び声が起こり、嘉平と善吉の罵り合う声がそれに続いた。水を打つばしゃりという音がした。

「紺、無事か！」清造が叫んで紺の尻尾に駆け寄った。しかしそれで戸口の押し合いの均衡が崩れた。銃声に動揺した子供らは難なく大人たちに押し切られて、外れた戸板が内側に倒れこむ。甲高い悲鳴があがった。板ごと子供らを踏んで中に入ろうとする男らに向かい、文六が鋤を構えて身構えた。途端に棒の打ち合う乾いた音が始まった。お石がやめてくれと悲鳴を上げる。

「紺！」

紺の尻尾は動かなかった。慌てた清造が荒く組まれたがらくたを除ける。壊れた蒸籠（せいろ）、古ぼけた行李、藁の痛んだ蓑（みの）……。そして清造はその下に意外なものを見た。尻尾の生えた小さな石灯籠、であった。

「こん？」清造は語尾を呑み込むように言葉を切った。

と、灯籠はまるで石臼のように火袋（ひぶくろ）から上をくるりと回して、それにつれ長い尻尾がふわりと辺りをひと掃きした。その石灯籠が喋った。

「――清造、おんしはほんとうにお人好しじゃの」

「こん？　ぶじか」

灯籠は清造の足の間をすり抜けると、滑るように板の間の真ん中に移動した。

「半年もおらに化かされるとはの。まったく愚かじゃ。まったく憐れじゃ」またくるりと回転する。清造が手を伸ばすと、灯籠はそれを避けて半歩ほど脇に跳んだ。

「こん、何をいっておる」

「蛇に食われておったのは幻じゃ。足が悪いというのもみな嘘じゃ。おとなしく暮らしおるように見せかけて、おら毎晩清造の背中で爪

を研いでいたよ。ただ楽に暮らせるから、清造を騙くらかしてここに居座らせてもらっただけ。気づかなんだか、ばかの清造」
腰を屈める清造。また半歩跳ぶ石灯籠。
「こん、」
「飯はまずいし寝床はちくちくした。でもな、寝て暮らせるのは有り難かったぞ。膳の上げ下ろしまで大名並みとはいかなんだが、ばかの清造にしてはよくやった。ほめてやる」
また追ってまた跳ぶ。
「こん、」
「村のものらはばか揃い。ここほど化かしやすい土地もなかろうて。わけてもおんし、清造はとびきりのばかじゃ。村一番のばかじゃ。日本一のばかじゃ」
そこで黙った。清造は手を止めて佇立(ちょりつ)した。刹那、ふたりは身を強ばらせたまま、一歩半の間をおいて対峙した。清造は石灯籠の灰色の穴に、紺の二つの目が隠れていることを感じ取った。覚られぬよう化けてはいるが、瑪瑙(めのう)のようにつややかなその黒い目は、清造を刺すように見詰めているに違いない。清造はゆっくりと口を開いた。
「紺、わしはおんしが人を騙すために化けたことがないのを知っておる。おんしが人のために働いたことも知っておる。詰まらぬことをいうでない。――いかにもわしは馬鹿じゃ。村一番の大馬鹿じゃ。おんしのいうよう日本一かもしれぬ。それでかまわぬ。よしそうなら、何としてもわしのまやかしを解くのは無理ぞ。残念じゃったの、わしはずっとおんしに化かされっぱなしじゃ」
「なにをばかな――」
清造が腕を伸ばし、また紺が跳んだ。と、灯籠の脚が壁ぎわに置いてあった小豆のざるの縁を踏んだ。途端にざるは覆って、ざあという音とともに赤い粒が床に流れる。いつか清造が餡を作るといって、紺が毎日手入れをしてきたあの小豆だ。その雨のような音に洗われて、石灯籠の表面が僅かに震えた。浮いていた尻尾が床に落ち

て、回る火袋が動揺したように辺りを見渡す。
「紺、もうよい」
言って伸ばした清造の手が、ようやく石灯籠の肩に触れた。見た目と裏腹にやはり獣の感触で、短い毛並みが手に暖かい。一瞬間、紺はその手に身を委ねる気配を見せた。
そのとき、入り口の防禦を破った庄兵衛の手勢が、上がりかまちに足をかけた。殺到する男どもが床に散った小豆を踏んで、刺すような痛みにあっという声を上げる。それで紺が我に返った。灯籠の石の肌が急にざわついて、畑をのうえを風が走るように黄金色の毛皮に戻ってゆく――。
子狐は、目を細めて清造を見上げた。
「清造、いままでありがとうな」
小さく呟く。そして一本と半分の脚で床板を蹴ると、躰を掴もうとする清造の掌をするりと抜けて、傍らの窓に向かっておおきくおおきく跳び上がった。
「紺、待て！」清造が叫んだ。
紺は窓枠に腹を打ち付けるようにしてそこを越えた。突き上げの棒がからりと外れて、落ちた木板が音を立てて窓を閉じる。吹き流しのように靡(なび)いた尻尾の先が、板と木枠の間に挟まれた。清造は慌ててその板を押した。尾の先の白い毛が、はらりと清造の足元に散る。だが紺はすでに窓を逃れて裏庭を走っていた。でこぼこの土の上に薄く積もった古藁を蹴散らして、裏手に迫った山裾の笹藪に潜りこむ。そこで紺は振り返った。最初の笹の根を巻いて滑らかに見返った紺の姿は、頭から尻尾まで見事な冬毛をした狐色の勾玉(まがたま)であった。細い鼻に長い髭、ぴんと立った耳は片方欠けている。その真ん中で、紺の黒い目が真っ直ぐに清造を見た。その目が二度ほど瞬いた。
「紺、ゆくな！　おんしは山では生きてゆけん！」清造が叫ぶ。それに横から誰かが取りついた。嘉平だ。
「清造、止めるな。これでよいのだ。いくら人のように振る舞うて

も、どだい共に暮らすのは無理なんじゃ。山のものは山に返さねばならぬ。わかれ」

だが清造は聞く耳を持たぬ。

「紺、だめじゃ！」

「清造、さらばといえ、清造！」

「紺！」

「さらばといえ！」

「こん、ゆくな！」

紺は黙って土のうえに目を落とすと、犬がするように頭を低くしたまま向きを変えて、そのまま藪の中に消えていった。清造は嘉平を突き飛ばして表に出たが、もうそこに紺の気配はなかった。

ここでこの物語は終わる。もとより古老が郷に伝えたむかし話、どこまで正しいかは定かでない。だが清造という男、鈴里の恩妙寺の来歴に名前が残っている。同一人かは不明だが、そのような名の人物がいたというのは本当のようだ。そしてこの恩妙寺の清造について、寺に伝わるいくつかの話がある。これを添えて結びとしたい。

曰く。

鈴里村山中清造、明治六年霜月、当寺下男として雇上の事。数え四十二。この男はじめ百姓であったが、村に馴染まず、土地を売って猟師に転ずる（作者注、同年鈴里村横山嘉平猟師廃業、農業に転じた由。交換か）。ところが堪（こら）えの薄きか生業に馴染まずか、ひと月に満たずして鉄砲を廃し、山近い当寺の門を敲（たた）く。この男寺内に起居すること甚だ遠慮、境内の一角に破屋を借りて住処となす。明治十八年蓄えをはたいてあばら屋の傍に稲荷社を結ぶ。爾来（じらい）当寺神仏混淆の寺となり、片隅の稲荷社を訪（おとな）う者いくたりかこれあり。明治十九年没。

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5149e/

紺狐

2010年10月8日15時34分発行